

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號四第 卷四十第

行發日一月四年一十正大

## 論叢

二重稅論

法學博士 小川郷太郎

我が國民所得の地方別研究

法學士 汐見 三郎

マルクス氏餘剩價值説の評論

法學博士 田島 錦治

小作制と小作法

法學博士 河田 嗣郎

## 時論

華府會議に於ける支那關稅問題

法學博士 末廣 重雄

我邦の營業稅を論ず

法學博士 神戸 正雄

勞働保險に關する一考察

法學博士 山本美越乃

## 說苑

地學觀社會學説に就きて

法學博士 財部 靜治

## 雜錄

獨逸の同盟罷業保險

經濟學士 岡崎 文規

安倍法學士譯「唯物史觀と餘剩價值」

法學士 水谷長三郎

竹内法學士譯「富國論」

法學博士 河上 肇

## 安倍法學士譯「唯物史觀 と餘剩價值」

水谷長三郎

福田博士の新著「社會政策と階級鬭争」中に於ける紹介によつて、人の注意を惹くに至つた、ツガン・バラノウスキの論著「マルクス主義の理論的基礎」(Tugan Baranovsky, Theoretische Grundlagen des Marxismus, 1905.)の大部分が、法學士安倍浩氏によつて「唯物史觀と餘剩價值」なる標題の下に翻譯された。さうして譯者が其の序文に於て、「我國は學問的に時代遅れだと云つて、マルクスの研究を嘲笑するやうな傾向が見えるのは甚だ残念の事である。克明に古代美

術を模寫する心持が必要だと思ふ。偉大なる者は常に偉大である。余が本譯を試みたのも、ピラミッドの礎石の一を置く其努力に外ならないのである。余がマルクスを批判し、又ツガン・バラノウスキを批判する事は、後日に殘されたる問題である。」と述べられてゐる所を見れば、譯者が其の翻譯に對する態度の極めて眞面目なるを窺ひ知る事が出来る。

私も亦、昨年來本書の一部を翻譯しつつある者なので、安倍氏の譯の出たのを幸として取り敢えず之を一讀して見たが、それは不幸にも私をして、茲に掲ぐるやうな批評文を書くべく餘儀なくしたのである。私は今便宜上第一篇の第三章社會發展の動力としての欲望(安倍氏に依ると、社會的發展の衝動力としての欲望)を一瞥して見やう。譯書の七〇頁には次の如く書いてある。

「Ceteris paribus 的に生活配慮は、労働生産率が少くなればなる程、愈々大なる人間の労働時間を要求する。」

私は再三再四此の譯文を讀んで見たが、終に

その意を解する事が出来なかつた。所が、原文はこれ程難しいものではない。今試みに原文を示して見やう。

Ceteris paribus muss die Lebensfürsorge eine um so größere Arbeitszeit des Menschen in Anspruch nehmen, je geringer die Arbeitsproduktivität ist (四十七頁)

一寸した獨和辭典には見付からないう。Ceteris paribusといふ言葉が其のまゝ譯本に出てゐるのは讀者に取つて極めて氣の毒な事である。が、此の拉丁語は拉丁語として通常使用せられる言葉であつて、少し詳しい外國辭典には直ぐ見出される言葉である。即ち英語では other things being equal と云ひ、獨逸語では alles übrige gleichgesetzt 又は unter übrigen gleichen Umständen と云はれてゐる。扱て、Ceteris paribus が斯やうな意味であるから、以上の原文は、「若し他の事柄が同じであるとすれば、生活配慮は労働生産力の發展の低きにつれて、益々多く人間の労働時間を要求せねばならぬ」と譯する方がより正確にしてより明瞭となるであらう。

又譯者は九十四頁に於て auri sacra fames と

云ふ拉丁語をそのまゝ木に竹を接いだ様に、「併し乍ら斯の如き限界を auri sacra fames は明白に知らなう」

と云ひ居られる。之は Vergil's Aeneid, BKIII, l. 57. に出づ来る言葉也。Davidson の英譯に於ては、Cursed thirst of gold と譯されてゐる。從つて、「Solche kennt aber auri sacra fames bekanntlich nicht.」(六十二頁)と云ふ原文は「が、

斯くの如き限界は、呪ふべき黄金の渴望の明白に知らない所である」と譯さるべきである。更に譯者は九十七頁に於て、極めて簡単な拉丁語「Panem et circenses」をそのまゝにして居られる。(原文六十四頁、"Panem et circenses")

が、以上述べたやうな事は、日本人として拉丁語を知る者の少ない今日或は見逃すべき事であるかも知れない。併し一方から考へて見ると、失禮な言ひ分かも知れないが、バラノウスキの如きあまり難解でない獨逸書をあまり上出来でない安倍氏の譯で讀まねばならない讀者が、如何して拉丁語を知る事が出来やうか？ 私は

安倍氏の力を疑ない。併し、安倍氏の誠實さを疑ふ者である。

逆戻りして六〇頁にある、第三章の目次の所を眺めて見やう。其處には「自己保存及び感覺的享樂に對する心理的欲望」と云ふ言葉がある。然るに原文四一頁には、*Physiologische Bedürfnisse nach Selbsterhaltung und nach sinnlichem Genuss*、とある。*physiologisch* は生理的の意味であつて、斷じて心理的を譯するべきではない。

原文には *psychologisch* (心理的) なる言葉が所々に散在してゐるので、譯者は形に於て少し似てゐるが、併し意味に於て全然殊なつてゐる。二語を混同されたのである。又その直ぐ後の同じく目次の所に「家族形式の經濟條件からの獨立性」と云ふ言葉がある。が、原文には、*Die Abhängigkeit der Familienformen von den Wirtschaftsbedingungen* とある。さうして譯者の獨立性に相當する言葉は、如何に苦心しても見出す事は出来ない。思ふに譯者は、*Abhängigkeit*

を獨立性と譯されたものらしい。然らば正に獨立性と譯すべき *Unabhängigkeit* は、譯者によれば、却て倚存性とても譯すべきであらうか？ 私は斯やうな不愉快な、不注意な誤譯を短かい目次の中に二つも發見したのである。これでは、譯者の翻譯に對する態度が、不注意であると云はれても又不誠實であると云はれても、譯者には何等の言譯の言葉も與へられないであらう。比較的注意すべき目次に於てすら、譯者は右のやうな誤譯をされて居るのである。だから、其他比較的目立たない場所に於ては、數多の不愉快な、不注意な誤謬を犯して居られるのは極めて自然な事である。夫等を一々指摘するのは譯者、讀者並びに私に取つて餘りに無趣味にして不愉快な仕事であるから、此處では一先づ差控へる事にしやう。

以上指摘した誤譯は、譯者の力と云ふよりも寧ろ不誠實を曝露するものであるが、以下私の指摘しやうとするものは、譯者の力に對する疑

ひである。

試みに譯書の七四頁を開いて見ると次のやうな文句を發見する。

此全然不安定な構成に依つて、マルクス唯にエンゲルスが彼等の歴史哲學的體系の根本思想を犠牲にする様誘惑されたのは、眞に不思議である。縱令斯の如き犠牲になくとも、稍々趣を異にしたことを、エンゲルスの以下の主張は形成する、「一定の歴史時期及び一定の土地の人間が生活する所の社會的施設は、生産の兩様式に依つて決定せられる、即ち一方に於て勞働の、他方に於て家族の發達段階に依り、勞働が發達する事愈々少く、其作出物の量即ち社會の富が愈々制限せられるならば、それだけ重要に社會秩序が性的紐帯に依つて支配せらるゝ様見へるか」と。』

一重の括弧内の文句は、エンゲルスの「家族、私有財産及び國家の起源」から引用されたものであつて、右の譯文の如くに疑問の形を取つてゐるものではない。さうして右の譯文によればエンゲルスの文句が主格となつて、「稍々趣を異にしたことを、エンゲルスの以下の主張は形成する」と云ふことになつてゐる。これ大なる誤りである。今原文(四九頁乃至五〇頁)を示すに、

Es ist währlich sonderbar, dass durch diese ganz in der Luft schwebende Konstruktion Marx und Engels verführt wurden, den Grundgedanken ihres geschichtswissenschaftlichen Systems preiszugeben. Was aber anders, wenn nicht ein solches Preisgeben, bildet folgende Behauptung von Engels: „ Die gesellschaftlichen Einrichtungen, unter denen die Menschen einer bestimmten Geschichtsepoche und eines bestimmten Landes leben, werden bedingt durch beide Arten der Produktion durch die Entwicklungsmute einerseits der Arbeit, anderseits der Familie. Je weniger die Arbeit noch entwickelt ist, je beschränkter die Menge ihrer Erzeugnisse, also auch der Reichtum der Gesellschaft, desto überwiegender erscheint die Gesellschaftsordnung be- erseht durch Geschlechtsban e. p. ”

を書かれてゐる。原文の終りにあるのは、Was aber anders, wenn nicht ein solches Preisgeben bildet folgende Behauptung von Engels の後に來るべきである。だから、安倍氏の譯文は、次のやうに根本的に書き改めねばならない。

「此の丸で空中樓閣のやうな構成によつて、マルクス及びエンゲルスが彼等の歴史哲學體系の根本思想を放棄するやうに迷はされたのは、實に笑ふべきである。が、斯やうな放棄がないならば、如何してエンゲルスの次のやうな主張が出て來るか、「一定の時代及び一定の國の人間が依つて以て生活する所の社會制度は、生産の二種類に依つて、即ち、一方

に於ては勞働の發展階段によつて、他方に於ては家族の發展階段によつて、制約されるのである。勞働の發展が後れてゐるにつれて、其の生産額は益々制限されて居り、従つて又社會の當の發展が後れてゐると云ふことのために、社會秩序は益々優勢に血族關係によつて支配されるやうに見えて來る」

此の根本的に殊なつた二つの譯文の中何れが正當であるかは、賢明な讀者に一任して置いて私は次の問題に移つて行かう。私は譯書の七八頁から七九頁にかけて、次の文句を見出すことが出来る。

「二三の原始的民族に於ける家族の形式は、近代の文明國民のそれと殆ど異ならない、而して家族に於ける妻の地位に關しては、吾々はむしろ總ての吾々の文明と共にモルガンによつて立派に記述せられたる印度人と比較して、其發達に在るのである。」

譯文の前半は正當であるが、その後半は之を理解するには少しく困難である。思ふに譯者は原文(五二頁)の後半を誤解されたらしい。成る程原文の Rückstand は、化學上の用語として「殘滓」と云ふ意味を持つてゐる。が、それをその儘こゝへ持つて來ては、前後の關係上意味をな

さない。即ち原文は、私の考へる所によると、

「二三の原始民族に於ける家族の形態は、近時の文明國民のそれと殆ど異ならない、さうして家族に於ける妻の地位に關しては、吾々は有らゆる吾々の文明を以てしても、モルガンによつて極めて巧みに記述された印度人に比較して到底及ばないであらう」

と譯さる可きである。

最後に、原書七二頁から七三頁にかけて出て來る所の、シュライエルマツヘルの有名な宗教の本質に關する定義は如何に譯されてゐるか。

即ち das Gefühl der schlechthinigen Abhängigkeit と云ふ言葉は、如何に譯されてゐるのであらうか。それは當然に「絶對的依憑の感情」と譯さるべきに、譯者は無雜作に一一〇頁に於て「簡単な隷屬性の感情」と譯されてゐる。これは、シュライエルマツヘルが宗教の本體を認識(ヘーゲル)又は意志(カント、フイヒテ)とす

る説に反對して立てた所の、彼れの云ふ宗教の本體の如何なるものであるかを髣髴たらしめる事は出来ない。

私はペダンチックに、哲學上の譯語を以て安倍氏を責めるのではない。哲學上の知識に付いては、ひとり安倍氏のみならず、（これは失禮な推斷であるかも知れないが）、私も亦全く駄目である。只私は安倍氏が一寸骨折りしたら私のやうな哲學的無識の者といへども見出す事の出来る問題を、その儘簡單に片づけられた不誠實を責めるのである。

私は極めて大ざつばに、安倍氏の譯文に對する疑ひを書き並べた。若し正確に根氣よく書き並べるならば、それは夥しい頁數に達するであらう。要するに其の序文のあまりに立派にしてその譯文のあまりに不出來である事は、往年の松浦氏の「全譯資本論」と共に、我國のマルクス文献に於ける白眉と云ふべきであらう。